

調印式

覚書の概要について

阿部 治

本日、対馬市と立教大学 ESD 研究所との ESD 研究連携に関する覚書締結調印式を開催できましたこと、本当に嬉しく思っております。これから、この覚書締結のねらいなどを簡単にお話しいたします。

対馬市のことは、ずっと気になっていたのですが、なかなか行く機会がありませんでした。あるとき、本日お越しくださっている前田剛さんが導いてくださって、当時所属していた本学大学院異文化コミュニケーション研究科の授業として、対馬市を訪れることができたのです。全域をご案内いただき、素晴らしい人、歴史、文化、自然にたっぷりと浸ることができました。その後、市の「域学連携」の委員に任命していただき、何度も訪問しております。

その後、立教大学の教員——今は退職しておられる方も多いのですが——が、対馬市をフィールドにして、さまざまな研究を行っていることを知りました。対馬市が大陸と日本をつなぐ縁があったということと同時に、実は立教も対馬市と長い関わりがあったわけです。そして、私自身も ESD (Education for Sustainable Development) を通して、対馬市と関わることになりました。

ESD とは、簡単にいえば「持続可能な社会の担い手を育てる学び」のことです。学校だけではなく、あらゆる学びの場をつなぎながら、持続可能な地域や社会をつくるための人を育てていく。私は「つながり学習」あるいは「関係性学習」と捉えています。今、世界のあらゆるものが時間や空間をこえてつながっていますが、一方でこのつながりは、どんどん希薄化しています。その中で、自分自身も他者も持続しない状況にある。この関係性を取り戻すことが必要だと思っているのです。

2002 年、ヨハネスブルグ・サミットで、日本政府が日本の NGO とともに「国連 ESD の 10 年」というものを提唱しました。私もその中心に関わってきたのですが、2005 年から 2014 年の 10 年間にわたって世界中で取り組んできた運動です。その中で、2007 年に日本で初めての ESD 研究機関である「立教大学 ESD 研究センター」(～2011/センター長・阿部治)を設立しました。これが今の「立教大学 ESD 研究所」(2012～/所長・阿部治)につながっています。その後、全国の大学でも、ESD を大学運営のひとつの柱に据えようというところが出てきて、研究機関も 7 か所ほどつくられました。立教大学では、そうした日本国内の ESD に関する高度教育機関、あるいは日本と世界の諸機関をつなぐハブとして活動を展開してきました。

現在、持続可能な社会をめざすための動きが、世界的に起こっています。たとえば、気候変動の問題です。2015 年 12 月にパリ協定が結ばれましたが、今世紀中に CO₂の排出をゼロにする、できればマイナスにしていくんだという非常に野心的な国際的な取り決めで

す。2015年9月には、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）を国連が決めています。グローバルな状況の中で、もう世界が続かないという危機意識が高まっているのです。私たちの世代が続かない、次の世代まで続かない。人は自然環境の上で生活しているわけですが、その自然環境も続かない。何とかしなければいけない。

こうしたグローバルな問題は、そのまま地域（ローカル）の問題に直結します。まさに私たちの生活そのものが、持続可能にならなければいけないのです。私たちのライフスタイル——そもそも地域自体が持続可能でないと、世界も持続にならない、ということになります。そんな中で、地域に根差した持続可能な社会づくりを、どのように進めていけばいいのかを考えると、ESDの「人づくり」という視座が最も有効なのではないかと私は思っています。

私どもは現在、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された研究プロジェクト「ESDによる地域創生の評価とESD地域創生拠点の形成に関する研究」（平成27～31年度 研究代表者・阿部治）を展開しています。ESDによる地域創生を目的とした大学と自治体の覚書締結は、今回が全国で初めての試みです。ESDの実証研究を通じた地域創生と、それを担う人材育成をめざすとともに、今後、海外を含めたどの地域でもカスタマイズ可能なESD地域創生プログラムを提示し、活用を促すことを企図しています。

今の政府は「地方創生」という旗のもと、莫大な予算を使っていろいろな取り組みを行っています。これらに対しては様々な評価がありますが、短期的な活性化に終始しているのではないかと思います。やはり、そこに住んでいる人たちが、自分たちの地域に誇りを持ち、そして将来に目を開く。だからこそ若い人が集まり、起業をし、そしてそこに住み着く。対馬は、そうした先進的な動きが展開されている地域であり、持続可能な地域づくりをめざす上で、世界の手本になっていくのではないのでしょうか。私も、対馬の諸事例に学びながら、何らかの形で協力したいと願っているのです。今回の覚書締結をきっかけに、世界に打って出られるような方向性を指し示すことができるのではないかと期待しています。まさに「つしまヂカラ」を立教大学にいただきながら、つしまヂカラと立教ヂカラを合わせて、一種の世直しをしていこうじゃないかと、社会に、そして世界に発信したいと思います。

（あべ・おさむ 立教大学教授／同ESD研究所所長）